

演題番号

フロリデーションは健康教育課題

-フロリデーション実施に関わる子を持つ30代女性の意識調査-
つついあきひと

事務局記入)

○筒井昭仁（福岡歯科大学口腔保健学講座）、安藤雄一（国立保健医療科学院）、堀口逸子（順天堂大学公衆衛生学教室）

【背景】フロリデーション（水道水フッ化物濃度調整）は諸外国で広く実施され、乳歯・永久歯う蝕を半分以下に減少させる効果をあげており、最も公衆衛生特性が優れるう蝕予防法と位置づけられている。しかし現在我が国で実施する地域はない。2001年に厚生労働省は、日本歯科医学会等の学術団体、日本歯科医師会等の専門団体の推奨声明を受け、地域の合意を持って実施されるものであり、要請があれば支援するとの見解を出した。フロリデーションは水道給水人口の全員が対象となる究極のPopulation Approachであり、実施には地域の合意が必要となる。これには恩恵を受ける受益者の積極的な意思や態度が必要条件として重要と思われる。

【目的】フロリデーション実施に関わる地域住民の意識を調べる。

【方法】フロリデーション実施の啓発が盛んなY, S 地区、フッ化物洗口実施中のN 地区、フッ化物利用の遅れたH 地区で、子を持つ30代母親を対象に、それぞれ2組ずつのフォーカスグループインタビュー(FGI)を行った。

【結果】Y, S 地区では、インタビュー中、“フロリデーション”という単語が何の違和感もなく口にされたが、N, H 地区では聞かれることはなかった。データの質的解析結果から、1) それぞれのフッ化物応用法について情報がなければ、地域住民は、その応用法の実施を選択する/しないの意思決定ができない。

2) 歯科専門家、行政関係者などからの利用推進情報に、身近な人からの好ましいとの情報が重なると、フッ化物利用に好意的な態度が形成される。

3) 少数であってもネガティブな意見をもった歯科専門家の存在によって積極的な選択が阻害される。

Y, S 地区では FGI の後半になって、

4) フロリデーションは選択の自由がなくなるということについて議論となった。

5) 浄水器を通す、調理などによるフッ化物への影響について、さらには体内蓄積、副作用などに関して疑問や意見が出された。

いずれも、地域や自分の問題として捉えたことによる発言と思われた。

【検討課題】

我が国においては、以下のようにフロリデーションは健康教育上の課題の1つと考える。健康教育関係者として検討いただきたい。

①ガン医療費とほぼ同額を費やし、ほぼ全員が罹患し、日々QOL を阻害している歯科疾患は、公衆衛生対策を必要としている。

②フロリデーションは、世界的規模で実施されて67年の歴史があり、う蝕を半分以下にする優れたPopulation Approach である。

③しかし、我が国では“フロリデーション”という単語さえ知られていない。

住民は、知らないものの実施/未実施を選択することはできない。少なくとも考えたり、議論するための教育が行われるべきである。

E-mail ; tutuia@college.fdcnet.ac.jp